

## 21世紀の人材と教育 ～「板挟み」「想定外」を考える～

東海学園大学  
学長 松原武久

「光がくもる」「オレンジ色」「便利さと調和」「コンピューター管理」「心が離れる」「孤独」これは21世紀という言葉からどんなことを想像しますかという問いに対しての中学三年生の答えです。昭和59年に出版された「21世紀をのりきる子ども」の序文の冒頭の一節です。ミレニウム新世紀まで16年という時点で、自分が30歳で社会の担い手になっている事を想像しての答えです。私はこの書物の共編著者として関わり、多くのアンケートをしたほんの一部ですが、21世紀に対するイメージを意外に的確に言い当てています。影の部分としてコンピューターに管理される人間が増える事、人間同士が孤立し心の結びつきが弱くなる事を挙げ、光の部分として人間の英知を挙げ、科学技術の飛躍的發展が新世紀を切り開くと答えています。

あれから32年経ちました、子どもたちが想像したコンピューター技術はロボットを超え自ら考える人工知能が社会や職業を変える時代になりつつあります。最近、野村総研から人工知能で代替される職業・されない職業がそれぞれ100種発表され、色んな場面で議論されています。芸術、歴史学、哲学など抽象的な概念を整理・創出するための知識が要求される職業や他者との協調や他者の説得、ネゴシエーション、サービス志向性が求められる職業は人工知能等での代替が難しいと指摘されています。デザイナー、カウンセラー、医師、教員、社会福祉施設介護員・指導員、プロデューサー、学芸員等代替可能性が低く、一般事務員、ICオペレーター、駅務員、建設作業員、給食調理人、測量士、自動車組立工等が代替可能性の高い職業とされています。人工知能の光と影を含め21世紀全体を見てみると、激動の時代、思いもよらないリスクと思いがけないチャンスのある時代といえます。複雑性と多様性と想定外が増え、あちら立てればこちら立たず、色々絡み合い見通しが立たない、ジレンマ、トリレンマが頻繁に現れ、それを解決する事が強く求められ時代になっていくと思われれます。

そういう時代の大学の教育内容とその指導は大量生産・大量流通・大量消費システムを前提とした定型業務処理能力、マニュアル型人間の育成であっていいわけがありません。20世紀型教育との決別は急務です。

大学の本分、不易な部分は、煎じ詰めれば有為な人材を社会の発展の為に供給し続ける事にあります。学生は社会人として貢献する中で個人としての人生も充実した有意義なものにしなければならぬと思います。

ところで有為な人材を送り出し続ける主体は誰かと言えば教職員と言う事になりますが、特に教員の学識、熱意、学修支援能力が大切で、その為の研修(研究と修養)は必須だと学生達を見ていて切実に思います。

G7教育大臣会合の倉敷宣言で教育の果たすべき新たな役割や教えや学びの改善・向上策がまとめられました。また、前述の如く野村総研は人工知能の急速な発展を受け、人工知能で代替される職業・されない職業を発表しました。これらは2030以後を見据えた新しい学びの大切さ

と緊要性を示しています。教える中身としての流行は「想定外」「板挟み」の教材を用意し、指導の方法としては価値葛藤が連続するような対話的活動を通した深い学びを構築する事ではないかと思います。

教育の中身はシラバスの熟度の向上、カリキュラムツリーの精選でかなり充実しましたが方法の研究は未だし観があります。

人工知能で代替されない能力を持った学生を育てるキーワードは「板挟み」と「想定外」。  
これを乗り越えられる人材を育てる指導内容と指導方法の研究が急務だと切に思います。

2017年9月20日